

プーチettは元氣 ——インド洋大津波と風評災害

市野澤 潤平 (いちのさわ じゅんpei) 東京大学大学院総合文化研究科



津波の直撃を受けて閉鎖中の建物の前には早々に露店が出現

現地の人たちによると、年が明けるとすぐに住民総出で瓦礫の撤去や清掃作業をおこない観光客を受け入れる体勢を整えたのだという。ところが、待てど暮らせど観光客は一向に戻らなかつた。

物理的な被害だけが災害ではない。経済の落ち込みなど、災害の二次被害は、ときに大きなダメージを地域社会に与え、しかも対策を立てるのが難しい。物理的な一次被害のインパクトの陰に隠れがちな、二次被害の問題に目を向けることの必要性を、痛感させられた。

が悪化して、観光客に敬遠される「風評灾害」。何とかアーケットは元気だということを日本の皆さんにも訴えたいと、住民たちは口をそろえる。しかし、マスコミ報道は被害の悲惨さばかりを強調し、統々と訪れる学術関係者もアーケットは素通りして、近隣の壊滅した漁村や被災者キャンプへと行ってしまう。その方が衆目を集めることはない。

○〇四年二月三・六日にインド洋沿岸を襲った大津波は、合計三〇万人以上を超す犠牲者を出した。タイにおいても、特にアンダマン海側の南部六県が津波の直撃を受け、数万人が被災した。そうした事態を受け、津波の被害と復興への課題を探るべく、世界中から多数の研究者が被災地に入りました。ボランティアの申し出や寄付金も、続々と集まつた。

当時、私は日本で被災状況の報道を追っていました。津波襲来の直後、正月休みのために日本のマスコミの動きは鈍かつたが、年明けになつてようやく詳しい情報が伝えられるようになると、被害の深刻さに驚かされるばかりだった。テレビ

ユースでは連日、まるでマッチ箱のように津波に押し流される建造物の映像が、繰り返し放映される。その多くが、観光客が偶然ビデオカメラに収めたものだったため、観光地が被災したタイ南部の映像が必然的に目立つことになってしまった。と目を疑うばかりだった。



ハイシーズンにもかかわらずビーチには人影がまばら